

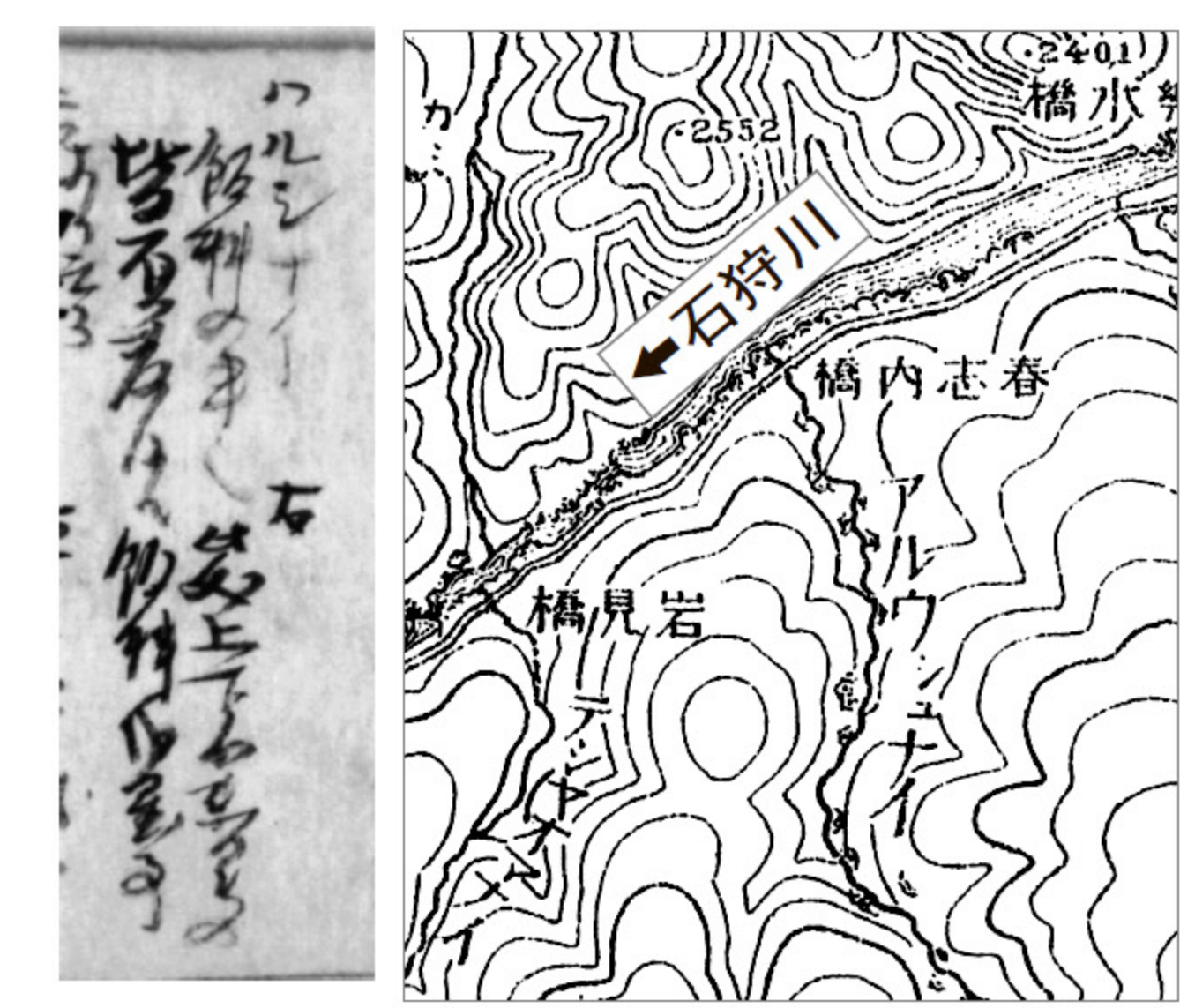
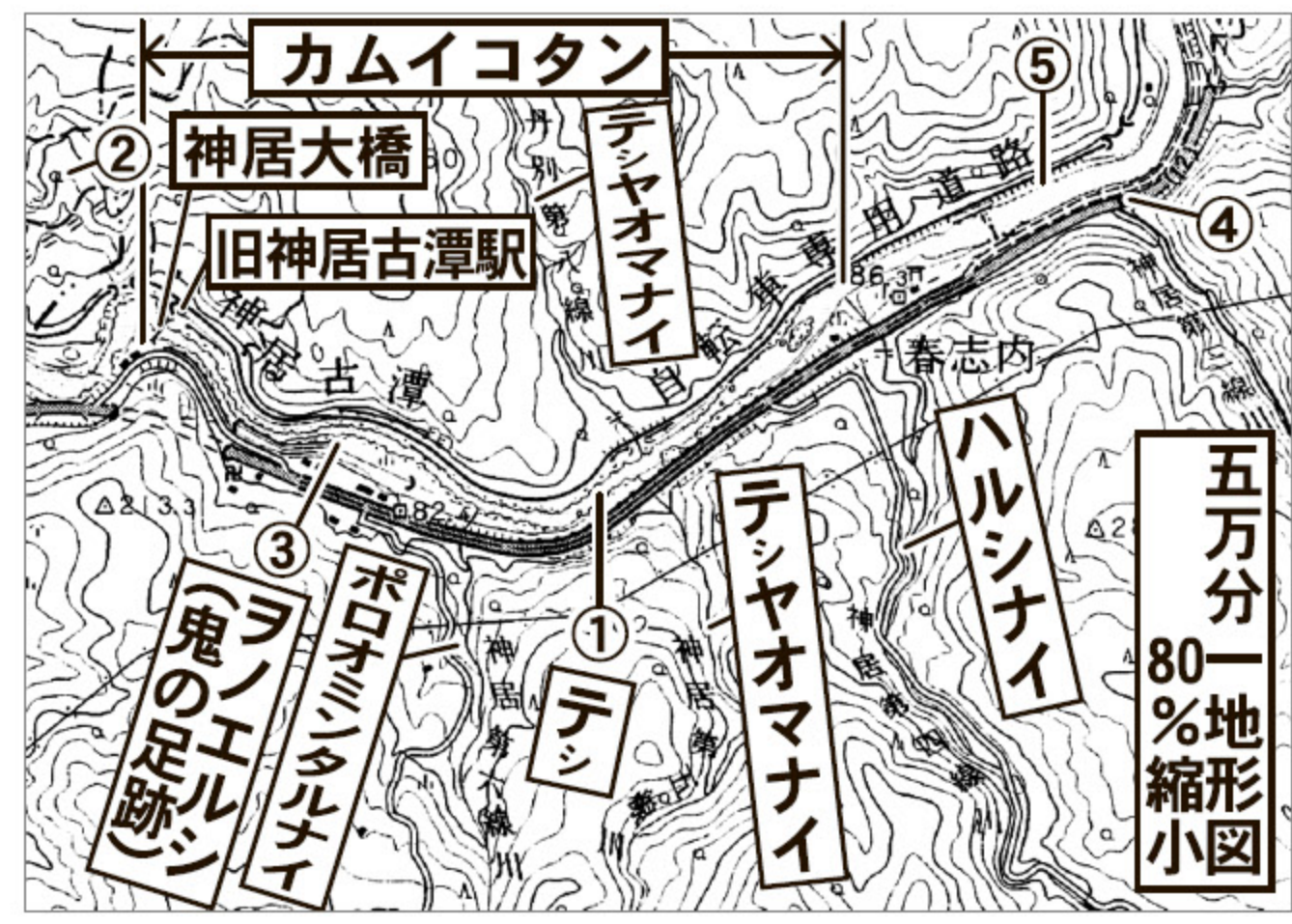
今回は、カムイコタンの最上流の掲載地図の「ハルシナイ」を通して、アイヌ語地名解釈も時代によって推移することを覗いていきたい。

上川から丸木舟で石狩川を下ってきたアイヌの人たちは、ハルシナイで丸木舟を止めて、ここで荷物を陸揚げし、ハルシナイから荷物を背負い、現在の神居大橋附近のシキウシバ(荷物背負場)まで運んだ。丸木舟は空舟にして下ろしたり、シキウシバから別な丸木舟に乗り換えて石狩川を下った。ハルシナイから下流約三キロは、奇岩怪石で川幅が狭く、激流となっていて、丸木舟を下ろすことは不可能であった。それで、アイヌの人たちは、この間をカムイコタン(Kamuy-kotan 神の・居所)と尊称していた。

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、丸木舟でシキウシバに着き、そこから約三キロを歩き、このハルシナイから別の丸木舟に乗り、上川に向かった。その時に持参した野帳(フィールドノ

断章 旭川のアイヌ語地名研究

72 高橋基



(1)ハルシナイ (2)アルウシュナイ

ート)の「第二番」に、次のように書いている(写真①)。

「ハルシナイー右。飯料の事也。此処上下より来るもの皆負荷にて飯料を置くより云の」

また、幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」には、次のように記述した。

「ハルシナイー右の岸小川、幅六間(約十・九尺)計急流也。ハルは食物の事也。此処下るものも上る者も、此処え飯料置処なるが故に号る也。柳の木有。此下少しの平地有。依て此処に止宿す。シキウシバより此処までをカモイコタンと云也。此間凡一里(約三・九キロ)と云えども少し近し。」

一般的にハル(haru 食料)は、食料を意味するが、知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』では「ハル(haru)ー食料。とくに携帯用の食糧(弁当)を意味

することがある。」とある。すると、松浦武四郎がアイヌの人たち

ちにハルシナイの意味を教えられたのは、ハルシナイは丸木舟から荷物を背負い上下するところなので、「弁当をいつも置いてある川」の意味で、「ハルシナイ(haru-us-nay 携帯用食糧 弁当がいつも置いてある川)との意味だったのであろう。

明治十九年八月、上川郡初の道路の上川仮新道が完成する。これによって丸木舟での往来がなくなり、明治二十三年に永田方正はハルシナイを調査し、次のように地名解をした。

「アルウシュナイ(aru-ush-nai 糧川)ー食糧をアルと云ふ。大川(註・石狩川)のピリ(註・渦)の岸に丸小屋を作り、魚を捕り此のアルウシュナイより陸揚げして食料に蓄ふ。故に此名

あり。春志内とあるは、上川アイヌの辞にあらざ。」

上川のアイヌの人は、ハル(haru 食料)の「h」を落として発音するので、この川は、アルウシュナイといい、春志内(はるしな)というのは、上川のアイヌの発音に合致しないので、上川のアイヌの言葉ではないと断定する。これを受けて、地図(2)のように明治三十年の陸地測量部の北海道仮製五万分一図では、永田方正の表記「アルウシュナイ」を採用している。しかし、松浦武四郎の記録を始め、旧記・旧図の大部分が、ハルシナイの表記なので、永田の指摘は妥当ではない。

昭和三十五年の知里真志保の地名解を見ると、丸木舟時代のこととは、全く忘れ去られた解釈となっている。

「春志内(はるしな)。ハルウシナイ(haru-ush-nai 食料・多くある沢)ーハルシナイ、アルウシナイ、アルシナイなどとも言った。この沢の奥には、ウバユリやギョウジャニンニクなどの食料植物が群生していたのでこの名がある。」

アイヌ語地名研究家の山田秀三氏は、旧記にこそ真実があると説かれた。このハルシナイもその典型で、松浦武四郎が記録したハルシナイ(携帯用食糧 弁当がいつも置いてある川)が、本義だったと思われる。

※毎月第1週号に掲載します (アイヌ語地名研究会幹事)

旭川のカムイコタン 29